

ガーシェンクロン著「歴史的観点から見た経済的後発性」がもつ 今日的意義

玉 木 俊 明

目 次

はじめに

I. ガーシェンクロンの理論

II. 現在の研究から見たガーシェンクロン理論の成果と問題点
—イギリスとの関係を中心に

III. 現在の研究から見たガーシェンクロン理論の成果と問題点
—ロシアとの関係をめぐって

おわりに

は じ め に

アレグザンダー・ガーシェンクロンが「歴史的観点から見た経済的後発性」を発表したのは、1952年のことであった¹⁾。それ以来50年以上にわたって、ガーシェンクロンのこの論文は、後発国の工業化に関する最も基本的な文献として、確固たる地位を占めてきた²⁾。

一般に、ガーシェンクロンの論は、「キャッチアップ型工業化」のモデルとして知られる。おおまかにいって、彼の議論には、次の4つの特徴があると考えられているといつてよい。

第1に、遅れて工業化をスタートさせる国は、先発国の技術と資本が利用できるので、先進国よりも工業化のスピードは速い。

第2に、後発国の産業構造は先発国に比べて早くから重化学工業化する。それは後発国では工業に適した熟練労働者が不足しており、最新技術を輸入によって導入することが可能になるからである。また、先発国では旧来の工場を廃棄しにくく、一方で後発国は新たに巨大な資本投資が可能なので、資本集約的で最新技術をもつ巨大設備産業が建設されるようになる。

第3に、このような重化学工業に必要な経営規模は大きいので、後発国では資本投入に応じて大企業化が進み、独占やカルテルなども形成されやすい。

第4に、後発国では資本も企業者も不足している。しかも産業に対する不信があり、大規模経営への要請が強い。したがって工業化の担い手である企業は、投資銀行や政府によって「上から」形

1) Gerschenkron (1952).

2) 我が国のガーシェンクロン・モデル導入の嚆矢としては、中川 (1962, 1981)。その他ガーシェンクロン・モデルとして参考すべき邦語文献として、杉山 (1964)、竹内 (1964)、大内 (1965, 1967)、金 (1987)、小野 (1987a)、小野 (1987b) 森田・ローズフィールド (1994)。

成されることになる。その際、重化学工業と大企業が重視される。

少なくとも日本の研究では、このうち、特に第1の特徴が強調されることが多いように思われる。あまりに強調されすぎているとさえいえるのかもしれない。後発国は後発であるがゆえに先進国の数多くの技術の利用が可能であり、発展のためのさまざまな条件を活用でき、かえって迅速な発展が可能であるとした理論である。アジア経済論においても、とりわけ第1の観点から、キャッチアップ型工業化論に基づく多くの研究が現れていることは周知の事実である。

ただし、ガーシェンクロンが対象としたのはあくまでヨーロッパであり、日本を除いて、アジアは彼の視野には入っていなかったことは重視すべきであろう。彼はあくまでも、ヨーロッパ経済史家にすぎず、本来の専門は、ロシア経済史であった。したがって彼の理論をナイーヴにアジアに当てはめることには、大きな問題点があろう。さらに本論文〔以下、「本論文」とは、「歴史的観点から見た経済の後発性」を指す。「本稿」とは、この拙稿を意味する〕は、極めて抽象的に書かれており、内容を正確に理解することは非常に困難である。30ページ足らずの論文ではあるが、イギリス産業革命以降のヨーロッパの工業化に関する、かなり広い知識がなければ、理解することはもちろん、読み通すことさえ極めて難しいといわざるを得ない。ガーシェンクロンの意見全体を理解せずに一部だけを取り出してそれを誇張して利用するとすれば、彼の主張を大きく歪めることにもなりかねない。また彼の文章のスタイル自体、いわゆる論文調からはほど遠い。注はたった2つしかなく、話があちこち飛ぶ。したがってどのような人物であれ、彼の論理をきちんと把握していると自信を持って断言することはできないだろう。まさに、ペダンティックとしかいいようのない文体である。最近ガーシェンクロンの論文集を翻訳した絵所氏自身、「翻訳作業は難解を極め、時折ため息がでるほどであった」³⁾と書いていることが、それを立証しよう。

本稿の課題は、以下の点にある。まず、本論文を基盤として、後発国が工業化する際の特徴をガーシェンクロンがどのように考えていたのかという問題に関する私論を提供する。次いでそれが今日の経済史研究からみて、どのような位置を占めるのかということに対して、私なりの結論を提示することを意図している。本稿は、歴史的な事象を捨象してモデル化するのではなく、あくまで史実に基づいてガーシェンクロンの主張を理解し、その現代的意味を提示しようという試みである。

ただ彼の論文が書かれて以降非常に研究状況が変わっている点を考慮しなければならない。国境を越えた地域工業化が重視される現在において、ガーシェンクロンの理論はあくまで一国史観である。その色彩が、あまりに強すぎるほどである。世界システム論も、プロト工業化論も、当時は存在しなかった。理論経済学の分析道具は、今日目から見れば初歩的段階にあった。本稿では、ガーシェンクロン以降の研究をふまえながらも、彼の説が今日どのような意義を持っているのかということに対する私見を提示してみたい。

3) ガーシェンクロン (2005) 277.

I. ガーシエンクロンの理論⁴⁾

ここでは、本論文の内容を紹介する。本論文は、「後発性の諸要素」、「銀行」、「国家」、「さまざまな段階の後発性」、「後発工業化のイデオロギー」、「結論」の5節から成り立っている。

「後発性の諸要素」において、ガーシエンクロンは、「本論文の主要な主張は、歴史的に重要な数多くの事例を見れば、後発国で工業化が始まる場合、その過程は、先発国と比較すると、発展のスピード（工業成長率）だけではなく、工業化の過程に由来する産業の生産的・組織的構造においても大きく異なる、という点にある」と述べた。彼によれば後発国の方が先進国よりも最新の設備を導入する傾向が強いが、それは最先端の産業に限られている。

後発国では、土地〔農業〕から切り離されて工場労働に適した労働者は、後発国では非常に少ない。そのような労働者の創出には、長期的過程が必要である。それは、19世紀のドイツにも、20世紀中葉のインドにもあてはまる。

「銀行」の節では、まず、ナポレオン3世時代のフランスの工業銀行発展の様子が描かれる。フランスでは、ペレール兄弟が創設した投資銀行であるクレディ・モビリエ（動産銀行）が、工業化に大きな役割を果たした。一方ドイツの銀行はユニヴァーサル銀行の典型例であり、イギリスの商業銀行が行っていた短期業務と、工業への投資を重視するクレディ・モビリエの基本的アイデアを結合したのである。

ドイツの銀行は、オーストリアとイタリアの銀行と同じく、監査役会を通じて、企業の金融管理と経営の決定にまで影響を及ぼした。イギリスではあまり銀行を利用することなく工業化が進んだが、工業化に際して重工業の発展に最大の関心を寄せ、工場規模が巨大であったドイツは、銀行の資金を大量に必要とした。

「国家」の節においては、ロシアが話題の中心となる。ロシアは、ドイツやオーストリアとは比較できないほどに低い地点から工業化を開始した。ロシアでは、国家の経済発展が、軍事的利益によって大きく左右された。急速な発展の時代には人民に大きな負担がかかり、その反作用で、長期的な停滞時代が続いた。それはピョートル大帝の治世に見られたが、その後も繰り返されたパターンである。1880～90年代のロシアの工業化は、このパターンの再現と見なすことができる。1880年代になって工業化が急速に進展したのは、鉄道建設がテコになったからだ。ロシアでは銀行に信頼がなく、政府が人民に税金をかけ、銀行の代わりをした。そして、重工業の成長を促進した。

「さまざまな段階の後発性」では、後発性がなくなっていく際に発生する影響が論じられる。例えばドイツでは、工業化が進展するにつれ、企業は、一つではなく、複数の銀行と取引を行なうようになった。かつては銀行が企業を支配していたが、同等の関係になった。

4) Gerschenkron (1952) については、近く拙訳が出版される予定である。玉木・薮下・角井・塩谷・佐藤・福留 (2006) 参照。これまでの翻訳として、久保 (2000)、ガーシエンクロン (2005) 第1章がある。

ロシアにおいては、革命政府の最後の工業化時代に、国家の重要性が減少した。国家による保護は不要となり、ドイツと比べれば小さかったものの、工業は政府からの自立度を高めた。さらにロシアでは、ユニヴァーサルバンクを特徴とするドイツタイプの銀行が発展していった。

「後発工業化のイデオロギー」では、サン・シモンが取り上げられている。彼の計画経済の教義はペレル兄弟によって取り入れられた。さらにサン・シモンと彼の支持者は、経済発展のために銀行の役割を重視した。

ナポレオン3世の第2帝政期において、クレディ・モビリエが創設された。この銀行は、国際商業や金融のみに関心を持つロスチャイルド家のような「古い富」の人々と異なり、工業にも投資する「新しい富」を代表していた。

ドイツにおいては、サン・シモンの影響を受けたフリードリヒ・リストの理論が、工業化に適合理的な理論となった。

1890年代のロシアの工業化においては、マルクス主義が大きな役割を果たした。ロシアは圧倒的な後発地帯だったので、強力なイデオロギーが工業化のために必要とされた。

「結論」では、19世紀ヨーロッパの工業化の歴史を基にしながら、後発地帯の問題を論じている。ここで中心となるのはソヴィエト-ロシアの分析である。まず19世紀ロシアの工業化の特徴は、決してロシアだけに見られたものではなかった。20世紀初頭に恒常的な経済発展があったものの、政治的革命のため、工業化は遅れた。

冷戦の時代になると、国境を越えて侵略される危機があるために、ソヴィエト-ロシアでは、独裁的な政権を支持し、国内で協力しているのである。ソヴィエト-ロシアの問題は、決して彼らだけの問題にとどまるものではない。ソヴィエトの工業化を遅らせるならば、その代償を支払うのは、単にソヴィエトにとどまらず、世界全体である。

II. 現在の研究から見たガーシェンクロン理論の成果と問題点

—イギリスとの関係を中心に

以上、ガーシェンクロンの論をおおまかにまとめてみた。ここでは、現在の研究状況から見た、彼の主張の長所と短所について、イギリスとの関係を中心に論じてみよう。

イギリスは、世界で最初に工業化を成し遂げた国家であった。したがってヨーロッパ諸国の工業化にとっては、イギリスがある種のモデルを提供したことは否定できない。イギリスの工業製品には、フランスからのスパイによって模倣された⁵⁾。しかしまた、ヨーロッパ諸国の工業化が、イギリスのそれとは異なる側面が多かったことも間違いない。ガーシェンクロンの貢献の一つは、イギリスを典型的モデルと見なさなかった点にある。言い換えるなら、ヨーロッパ諸国のさまざまな工業

5) Harris (1998).

化のパターンを描きだした点にある⁶⁾。

現在では、イギリスの工業化が工業化の唯一のパラダイムではないことは広く認識されている。イギリスは確かに世界で最初に産業革命を経験した国であった。かといってそれに続く国々がイギリスの模倣をしたとすれば、イギリスを越えることはなかなか難しい。イギリスの経験も利用しつつ、イギリスとは違った方法をとって当然である。このことは、今日ではむしろあまりに当然のこととして受け入れられている。

日本人の研究に限っても、ヨーロッパ大陸での地域工業化の研究はずいぶん活発である⁷⁾。また、グローバルヒストリーの領域では、ヨーロッパの工業化を資本集約的工業化とし、アジアの工業化を労働集約的工業化と捉える立場もある⁸⁾。イギリスをモデルにするのではなく、アジアとヨーロッパが比較されることが多い⁹⁾。

工業化に関しては無数といってよいほどの研究蓄積があり、イギリスの工業化はむしろのこと、ヨーロッパの工業化に関してもかなり相対化した見方がとられるようになった。しかし1950年代初頭には欧米以外に工業化した国は日本くらいしかなく、まだイギリスの経済力は強かった。したがってガーシェンクロンには、かなり先見の明があったといわなければなるまい。

しかしフランスの工業化については、現在の研究では最初に工業化した地域はアルザスであるという考えが妥当だろう。とすれば、「フランスの」工業化というより、アルザスの地域工業化と捉えるべきである。また、ナポレオン3世の統治下に話を限定するのは、あまりに短期的に捉えているとしかいいようがない。少なくとも19世紀前半から工業化が開始されるという見解が、おそらく今日では支配的であろう。

ドイツの工業化については、金融業の役割が重視されている。そのためか、ルール工業地帯の重要性については、言及されていない。現在でもライン川沿いの地域は¹⁰⁾、世界有数の工業地帯であって、ユニヴァーサルバンクの役割を重視するあまり、それに言及しないのは問題であろう。むしろライン地域の工業化は、地域工業化のモデルとしても注目されている。時代という制約があったにせよ、ガーシェンクロンがライン地域に注目しなかったのは、不思議というほかない。

さらにクラウス・ヴェーバーによる最新の研究では¹¹⁾、ドイツの工業都市は他の国々とは異なり、巨大な河川沿いにあることが多い。そのため大西洋貿易に使われていた船舶が、直接工業都市に進入できた。ドイツの都市がプロト工業化を成功させたのは、大西洋貿易によって都市に大西洋貿易による商品が直接輸入させたことが一因となった。

ガーシェンクロンの論に基づけば、英仏独の工業化は、金融面から比較することが可能である。

6) 角山 (1981) 55-62.

7) これに関しては、枚挙にいとまがないが、最も最近のまとまった業績としては、篠塚・石坂・高橋 (2003).

8) Sugihara (2002).

9) 例えば、Pomeranz (2000).

10) 渡辺 (1987).

11) Weber (2002).

イギリスは銀行とはほとんど関係がなかったが、ドイツはユニヴァーサルバンクが工業界を支配した。フランスはいわば、その中間にあたるといえよう。工業化における銀行の重要性を強調したことは、ガーシェンクロンの視点が優れていたことを意味する。

しかしガーシェンクロンの説は、今日の経済史研究の水準からは、やはり時代遅れといわざるを得ない。

周知のように、イギリスではケインとホプキンズにより「ジェントルマン資本主義」が提唱され、イギリスの資本主義の特徴は、工業あるのではなく、19世紀からのイギリス経済のリーディングセクターは金融業であったと主張された¹²⁾。彼らの説は、日本で一般に言われているものと違い、グローバルヒストリーとは関係なく、イギリス一国の、しかもイギリス諸島を中心としてみたイギリス史だと捉えるべきである。また、工業化そのものを否定するのではなく、世界で最初に工業化を経験したにもかかわらず、イギリスの経済の特徴は工業化によって変わったのではなく、「ジェントルマン的な人々」——1688～1870年頃までは地主が、それ以降はマニド・インタレスト——がイギリス経済をリードしたと主張している。

このような面から考えるなら、近代のイギリス経済における金融業の重要性は言を俟たない。しかも、ケインとホプキンズへの批判者の多くがいうように、現実には北西部の工業社会とロンドンのマニド・インタレストの間に経済的交流があったのなら、金融業と工業の結びつきがなかったとは思われない。

さらにアリス・カーター¹³⁾以来、正確な額と理由は不明であるが、オランダ資金がイギリスに流入したことは、今日では定説となっている。これらの資金がシティに流れた。そこから先のルートは不明であり、マンチェスターの工業化に使われたかどうかは証明できない。しかしながら、北西部の工業社会とロンドンのマニド・インタレストとの間に関係がなかったわけではない以上、具体的な実証は困難だが、イギリスの金融業の発展と工業化との間の関係を無視するわけにはいまい。

ところでイギリスの工業化の場合、ガーシェンクロンの見解では、それ以降の工業化と比較すると、銀行の役割は小さかった。イギリスの銀行は商業銀行が主体であり、ユニヴァーサルバンクを中心としていたドイツとは決定的に異なる。後発工業国であるドイツでは、工業化において、銀行の役割がイギリスよりも高かった。このようなヒルファディングの『金融資本論』¹⁴⁾に見られるような考え方は、比較的最近までは広く支持されていた見解である。

とはいえ現在の研究動向では、イギリスの金融業の発達も重視されている。具体的には、イギリスの工業化に使用されたと思われるオランダ資金の役割が重要視されているのである¹⁵⁾。しかもイギリスには財政（金融）革命と呼ばれる現象があり、長期債を中心とするイギリスの公信用制度は

12) ケイン・ホプキンズ (1997). Cain and Hopkins (2002).

13) Carter (1975).

14) ヒルファディング (1982).

15) Neal (1990).

イングランド銀行を中核として発展していった¹⁶⁾。戦争遂行のために巨額の負債を抱えていたイギリスであったが、議会在が国債の返還を保証するファンディングシステムが大きな支柱となって、国債の買い手には困らなかった。ナポレオン戦争が終結した1815年にイギリスはヨーロッパ経済のヘゲモニーを握る国家として誕生したが、それには金融市場発展のために、1世紀以上におよぶ歳月を要した。もし金融市場の発展がなければ、イギリスの工業化もなかっただろうと思われる¹⁷⁾。

オランダでは、イギリスに先んじて金融制度が発展していったが¹⁸⁾、最近の研究では、オランダの財政革命は短期債を次々に借り換えていったものであり¹⁹⁾、長期債を発行したイギリスとは、この点で根本的に違っている。とするなら、金融面での先進性こそが、イギリスを工業化にいたらしめたとも考えられよう。このように、現在の研究状況は、ガーシェンクロンの時代とはまったく変わっている。

こうした観点からは、ユニヴァーサルバンクが大きな役割を果たした点においてはイギリスとドイツは異なるものの、金融資本が工業化に欠かせなかった点については同じだと考えられる。しかも、ガーシェンクロンはドイツで銀行が演じていた役割を国家が果たしたと述べているが、現在の研究では、工業化における政府の役割はイギリスにおいても、非常に重視されている。イギリスはフランスとの戦争で自国の製品の市場を保護した。イギリスは18世紀に重商主義政策をとったからこそ成功したという見解が、現在ではむしろ一般的である。

このような主張の代表者は、パトリック・オブライエンである。オブライエンは、工業化における政府の役割を重視する。彼はいう²⁰⁾。

現代の工業化の発生、発展、継続は、私企業によってなされたのである。しかしまたそれらは同時に、政府が維持し、支えた機能・規則・制度の枠組みの内部で行われたことでもあった。

工業化を遂行する際、どの国にとっても、政府の役割は重要である。イギリスにおいても、それは変わらなかった。中央政府が巨大になり、フランスとの戦争で勝利を獲得しなければ、イギリスが世界最初の工業国家になることは不可能だったろう。政府は——民間企業では不可能な——公共財を提供して、企業を保護する必要があった。

このような考え方は、ヴェネツィア経済史の泰斗フレデリック・レインの「保護費用」理論と関連する²¹⁾。レインによれば、商人が活動するためには、商業活動を妨害されないように、暴力装置を使って保護するからこそ必要があった。そのための費用を「保護費用」といい、そのために商人

16) Dickson (rep. 1993).

17) Roseveare (1991).

18) Tracy (1985).

19) Fritschy (2003).

20) オブライエン (2000) 29.

21) Lane (1979).

が支払う費用を「保護レント」と呼んだ。例えば中世の商人は保護費用を自ら負担しており、時には保護レントを支払ったが、近世になると国家が商人を保護するようになり、商人は保護レントの支払いを免れるようになる。

上述の議論を考慮すると、イギリスの工業化における政府の役割を重視しないガーシェンクロンの理論には、大きな問題点があるといつてよい。

また、金融問題を論じる点に代表されるように、ガーシェンクロンの理論の問題点は、工業化とは、急激に経済発展が始まることだと捉えている点にある。確かに本論文が書かれた当時には、工業化とは、急速に起こる経済変化であると考えられていた。

いうまでもなく、今日ではこのような見方は通用しない。イギリスの工業化は、現在の目から見れば、きわめてゆっくりとしたスピードでしか進まなかったからだ。近代イギリスの経済成長率は、論者により多様な解釈があるが、今日の目から見れば極めてモデレートなものだったということは、一致する見解になったといつてよい。したがって spurt という用語を多用するガーシェンクロンの発想自体、今日では時代遅れのものとなったと思われる。

英仏の差も、以前に考えられていたほど大きくはなかった。18世紀には、イギリスと同様、場合によってはそれ以上に、フランスは経済発展を経験していた²²⁾。フランス革命・ナポレオン戦争により、フランスはイギリスの後塵を拝し、イギリスがヘゲモニー国家になったと考えられている。結局、イギリスがなぜ工業化に成功したのかという唯一の理由はなく、産業革命をおこしそうなくつかの国の一つに過ぎなかった、とオブライエンはいう²³⁾。

オブライエンの主張は、産業革命の根本的要因を経済史研究の最重要事と考えていた日本の学界では、いまだに受け入れがたい説かもしれないが、欧米ではむしろ主流となりつつあるようだ。

要約しよう。ガーシェンクロンは、イギリスの工業化を「典型」とみなかった点では非常に先見の目を持っていたが、イギリスと他国との類似点に関しては、あまり目を向けなかった、さらに、工業化をあまりに短期的過程だと考えた。これらの点に、彼の論の弱点があった。

Ⅲ. 現在の研究から見たガーシェンクロン理論の成果と問題点

—ロシアとの関係をめぐって

本論文において、最大のスペースが与えられているのは、ロシアに対してである。これは、彼がロシア出身であることを考慮するなら、驚くにあたらない。しかしこれまでの我が国のガーシェンクロン理解においては、この点の配慮がやや欠けていたのではないと思われる。「キャッチアップ型工業化」のパイオニアワークとしての重要性を強調しすぎる傾向があった。キャッチアップ工業

22) Crouzet (1966). 服部 (1992).

23) Vries (1999), 10.

化の代表国としてガーシェンクロンが取り上げたのはロシアであった。決して、アジアでも南米諸国でもない。少なくとも本論文から判断するかぎり、ガーシェンクロンには、世界全体を俯瞰するような眼はなかったといつてよい。

私の見るところ、ガーシェンクロンは、特にロシアの工業化について論じたかった。それ以外の国の分析は、ロシアの特徴を浮き彫りにするために行なわれたように思われる。それは、ロシアに割かれたスペースが最も大きかったことと、結論の最後の部分で、ロシア（ソヴィエト）の工業化について、その擁護とさえ受け取られる主張をしていることから推察される。

ガーシェンクロンによれば、ロシアはドイツと同様、後発性の利益を大きく享受した国であった。しかしロシアは、ドイツと比べて30年以上工業化へのスパートが遅れ、1880年代中頃に工業化を開始した。1861年まで農奴制が保持されたこともあり、ロシア経済は著しく遅れていた。

ロシアの工業化は、ピョートル大帝以来、非常に似通ったパターンをたどり、最終的には失敗することとなった。経済発展が必要になると、たまたまその時代に生まれついた人々に多大な負担が背負わせられた。政府の強制力は大きかった。それゆえ、急速な発展の時代に長い停滞の時代が続く可能性はかなり高い。というのは、人民の物理的忍耐力を越えた努力がなされ、長期間に及ぶ経済的停滞が必然的に生じたからである。ピョートル大帝は、農奴を重要な労働力として有効に活用した。

1890年代のロシアは、1850年代のドイツとは異なり、資本が不足していた。そのため、多額の資金を持つ銀行制度により、大規模な工業化を遂行することはできなかった。しかも、商業的誠実さの基準は悲惨なまでに低かった。そのため、どの銀行も、長期的な信用供与には成功しなかった。したがって銀行ではなく政府が、税制を通じて、所得を消費から投資に振り向けたのである。ロシアにとって関心があったのは重工業であり、軽工業ではなかった。しかも工業化に対するロシア政府の関心の多くは、軍事政策に偏重していた。

1890年代の工業発展に続いて生じたのは1900年の不況であり、さらに戦争と国内の混乱が生じた。しかしロシアは1905～06年の革命の後、1907～14年に高度経済成長を成し遂げた。この時、工業化の過程の特徴は大きく変化した。政府による鉄道建設は続いたが、それよりも工業生産高の増加が相対的にも絶対的にも大きかった。軍事費がある程度増加したけれども、鉄道建設の重要性が減少したのを埋め合わせるほどではなかった。革命前政府の最後の工業化時代に、国家の重要性が極めて小さくなったのである。

これ以前には、結局ロシアは工業化ができそうになってもつぶれるというパターンをたどっていたのだが、幸いにも今回は続かなかった。政府の活動は縮小した。だが工業の停滞にはつながらず、工業の成長が続いた。ロシアの工業は、政府の支援が不要になり、国家の機能の一部を銀行が独自の道を歩み始める段階に到達した。

ロシアでは、イギリスタイプではなく、ドイツタイプの銀行であるサンクト・ペテルブルクの銀行が発展した。ロシアの国家が支援した工業化によってロシアの後発性が減少した後、新しい「後

発性の段階」に適合的であり、それまでとは違う工業化のための制度が適用可能になった。後発国という点で、ロシアとドイツは似ていた。

後発国の工業化の進展に際しては、それを支援するイデオロギーが必要になる。例えば、フランスの工業化の場合サン・シモンの、ドイツにおいてはフリードリヒ・リストのイデオロギーが工業化を促進した。それに対し、1890年代のロシアの工業化に大きな影響を与えたのは、マルクス主義であった。ロシアは「絶対的」な後発的地位にあったので、フランスやドイツ以上にはるかに強力なイデオロギーが出現し、工業化の知的・感情的車輪に油をさす必要があった。マルクス主義は、その役割を十二分に果たしたのである。

工業化が大きく遅れると、社会的緊張が高まる。その典型的事例は、ソヴィエト-ロシアである。ソヴィエト-ロシアの工業化の遅れは、独裁政府の手中に落ちたロシア革命が原因であった。人々の大部分は、独裁政府に敵対的であったが、独裁政府が続いたのは、もしなくなったら、重要な社会的機能が果たせなくなるとロシア人自身が感じていたからである。

現在のように、資本主義と社会主義陣営に「二極分化した世界」では、ソヴィエトの脅威が誇張されている。

19～20世紀の歴史的経験から、20世紀の重要な教訓は、後発国の問題が、単に彼らだけの問題にはとどまらないということがわかる。もしロシアの基本的に特異な経済の後発性を無視するなら、後発国に対する政策は、成功を収めそうにないだろう。あまりにソヴィエトを敵視するなら、それは資本主義陣営にとってもマイナスの影響をもたらすだろう。

お わ り に

本稿の主張とは、本質的に、私自身のガーシェンクロン理解にすぎない。それが絶対的に正しいと主張することはむろん不可能であるし、そのつもりもない。しかし同時に、彼の説を単に「キャッチアップ型」工業化の代表的理論とし、さらには後発国の工業化全般に当てはめるとすれば危険をとまらうということは示すことができたと考えたい。ただし当然ながら、ガーシェンクロンの論文を実際に読み、それをアレンジし、今日の後発工業化に適応することには何の問題もない。しかしそれを、ガーシェンクロンの理論ということではできない。

ここでは、私がガーシェンクロンの説と考えるものが、今日の経済学でどのような価値を持つのかということを考えてみたい。

「キャッチアップ型」の代表例としてガーシェンクロンの論を取り上げる場合、「はじめに」で言及したように、第1の「遅れて工業化をスタートさせる国は、先発国の技術と資本が利用できるのに、先進国よりも工業化のスピードは速い」という点に特に関心が集まっている。実際彼はその通りの主張をしており、それに反駁するつもりはさらさらでないが、ここでは第4の「上から」の工業化と、それを可能にするための指導者の役割について考察してみたい。

今日では、経済発展に対する国家の役割が重視されていることは既に見た。仮に私企業しか存在しなかったとしても、国家は私企業が負担できない「公共財」を提供する必要がある。したがって「夜警国家」などというものは存在しえない。イギリスの場合、世界で初めて産業革命を経験したのであって、それは意図したことではなく、むしろ意識しないままに結果的に産業革命が発生したはずである。そもそも産業革命ないし工業化なるものの存在を知らなかったのだから。

しかし後発国になればなるほど、先発国の経験が利用可能である。ロシアの場合、イギリスのみならず、ヨーロッパ大陸のさまざまな国の工業化の経験を活かすことができた。したがって、ロシアの工業化では、「はじめに」には書かれていない政府ないし国家の役割が重要だったと考えられる。これはどの国の工業化においても、無視することが出来ない要素である。この重要性については、次に引用するオブライエンの言葉がヒントになる²⁴⁾。

国家は、工業製品を製造するための、資金の一部を提供し、それを計画し、補助金を与えたが、一般的にみて、次のようなインフラストラクチャーを提供した。それは、通信伝達、エネルギーの供給、教育と訓練、情報と技術的助言、安全である。これらは、国民的工業に対する民間部門の投資を促進し、私企業の経営を支えるために提供された。

19世紀～20世紀初頭のロシアは、現実的にはこれらの機能を十分に提供できたとは考えられない。ロシアがなかなか工業化できなかった一因は、ここに由来する。

ロシアが「上から」の工業化をするためには、非常に強力なリーダーシップを発揮する人物が必要であった。ガーシエンクロンは明確には述べていないが、それはスターリンであったように思われる。

ガーシエンクロンが本論文を書いた当時、スターリンは存命であり、また親ソヴィエト的発言をすれば、迫害を受けた可能性は高い。したがって極めてあいまいな書き方しかできなかったのかもしれない。ともあれ私の印象では、ガーシエンクロンはソヴィエトの経済発展を遂行する指導者として、スターリンの役割を高く評価している²⁵⁾。

ここから考えるなら、例えばアジアの工業化における、さまざまな指導者の重要性も、ガーシエンクロンの議論を基に指摘できるというべきだろう。もとよりスターリンと近年のアジアの指導者を直接比較することは慎むべきである。当然ながら、アジアの指導者がスターリンのように残虐なわけではない²⁶⁾。私がいいたいのは、後発国の場合、工業化を推進するには国家的な指導者の存

24) オブライエン (2000) 28.

25) また近年、スターリンによる5カ年計画で、ソヴィエトは大きく経済発展をしたという研究も上梓された。Allen (2003).

26) またガーシエンクロンが「歴史的観点から見た経済後発性」を著した際、スターリンの残虐性は今日ほどには知られてはいなかった。

在の必要性をガーシェンクロンが強く主張していることである。ガーシェンクロンの主張の先見性として、この点を見逃すことはできないだろう。また、工業化に向かうために国民を団結させるイデオロギーを重視した点も、後発工業化にとっての重要な指摘であるといえよう。「キャッチアップ型工業化」は、国民の意識を工業化に貢献するように向けなければならない、また時によって、そのようにする指導者の必要があるだろう。

それに対し、ガーシェンクロンの議論で基本的に欠けているのは、ディマンド・プルの発想である²⁷⁾。

たとえ政府がどれほど私企業の経営を支えるための基盤整備をしようと、企業がどれほど最新の技術を導入しようとも、また工業化のために、サプライサイドから見たあらゆる事柄が整えられたとしても、それだけでは工業化できないことはいまでもない。市場の需要に創造的に反応 creative response²⁸⁾する企業家が必要なのである。工業化に成功するためには、新たな需要を嗅ぎつけ、そのためにあらゆる組織を編成する企業家が不可欠である。しかもそれが、大量に出現しなければならない。この視座が、ガーシェンクロンにはあまりない²⁹⁾。

まとめてみよう。ガーシェンクロンが本論文で論じたことは、既に述べたように、今日では多くの部分が時代遅れになっている。日本を除いて、視座がヨーロッパにとどまっていることが、他地域への理論の単純な応用を困難にしている。それと関連するが、先発国が後発国に関してどのような負の影響をもたらすのかもわからない。先発国は、後発国の工業化を助けるのか妨害するのかということに触れられていない。前者の場合、そのためにどうすれば良いのかが問われるべきだろう。さらに後発国と先進国の技術格差は、現在では絶望的なまでに開いている。したがって、後発国が先進技術を導入することはほぼ不可能である。ガーシェンクロンが論文を作成した時代とは明らかに状況が異なっている。

しかしイギリスを典型例とみなさなかつたこと、銀行＝金融の重要性を強調したことは、今日もなお高く評価されるべきである³⁰⁾。後発工業化における国家の役割を重要視したことは、後発国の優位性の主張と同様、現在もその輝きを失わない。われわれにとって必要なことは、後発国が、どのようにして市場の動向に敏感に反応し、新しい市場を獲得できる企業家を養成するかという理論であろう。それをガーシェンクロンの論に付け加えることができるなら、彼の学説はまだまだ長生きするだろう。それはまた、「キャッチアップ型工業化」の議論にとっても、重要なことになるに違いない。

27) これは、ガーシェンクロンだけではなく、工業化をめぐる議論全体におおむねあてはまる傾向だろう。

28) シュンペーター (1998)。

29) ガーシェンクロンは別の論文で、ロシアでは特にロシア人企業家に敵対的態度があったことを指摘している。とすれば、工業化が進まなかった理由も理解できよう。とはいえ、ロシアの後進性があまりに強調されており、他国でも新規の企業者が必ずしも進んで受け入れられてはいなかったことは軽視している。Gerschenkron (1953)。その翻訳のガーシェンクロン (2005) 第3章。

30) ガーシェンクロンが工業化に対する金融の役割を重視したことを高く評価する論文集として、Fortyeth and Verdier (2003)。

参 考 文 献

- Allen, Robert C. (2003), *Farm to Factory: A Reinterpretation of the Soviet Industrial Revolution*, Princeton and Oxford.
- Cain, P. J. and A. G. Hopkins (2002), *British Imperialism 1688-2000*, 2nd edition, London.
- Carter, Alice (1975), *Getting, Spending and Investing in Early Modern Times: Essays on Dutch, English and Huguenot Economic History*, Assen.
- Crouzet, F. (1966), “Angleterre et la France au XVIIIe siècle: Essai d’analyse comparée de deux croissances économiques”, *Annales: ESC*, 21.
- Gerschenkron, Alexander (1952), “Economic Backwardness in Historical Perspective” in Bert F. Hoselitz ed., (1952), *The Progress of Underdeveloped Areas*, 3-29. 久保清治訳 (2000) 「歴史的視野からみた経済の後進性」『横浜商大論集』33-2. ガーシェンクロン (2005) 第1章, 絵所秀記訳「歴史的視野から見た経済の後進性」.
- Gerschenkron, Alexander (1953), “Social Attitudes, Entrepreneurship and Economic Development”, *Explorations in Entrepreneurial History*, Vol. 4. ガーシェンクロン (2005) 第3章に邦訳. 峯陽一「社会的態度, 企業家精神と経済発展」.
- Dickson, P. G. M. (1967, rep. 1993), *The Financial Revolution in England: a Study in the Development of Public Credit*, Aldershot.
- Fortyth, Douglas, J. and Daniel Verdier (2003), *The Origins of National Financial Systems: Alexander Gerschenkron Reconsidered*, London and New York.
- Fritschy, W. (2003), “A ‘Financial Revolution’ Reconsidered: Public Finance in Holland during the Dutch Revolt, 1568-1648”, *Economic History Review*, 2nd ser., 54.
- Harris, J. R. (1998), *Industrial Espionage and Technological Transfer: Britain and France in the Eighteenth Century*, Aldershot and Vermont.
- Lane, Frederick (1979), *Profits From Power: Readings in Protection Rent and Violence-Controlling Enterprises*, Alnamy.
- Neal, Larry (1990), *The Rise of Financial Capitalism: International Capital Markets in the Age of Reason*, Cambridge.
- Pomeranz, Kenneth (2000), *The Great Divergence: Europe, China, and the Making of the Modern World Economy*, Princeton.
- Roseveare, Henry (1991), *The Financial Revolution 1660-1760*, London and New York.
- Tracy, J. D. (1985), *A Financial Revolution in the Habsburg Netherland: Renten and Rentiers in the County of Holland, 1515-1565*, Berkeley and Los Angeles.
- Sugihara, Kaoru (2002), “Labour-intensive Industrialisation in Global History” Paper presented to XIII Economic History Congress Buenos Aires 22-26.
- Vries, Peer, “The Study of Contrasts across Europe: An Interview with Patrick O’Brien”, *Itinerario: European Journal of Overseas History*, Vol. 23.
- Weber, Klaus (2002), “The Atlantic Coast of German Trade: German Rural Industry and Trade in the Atlantic, 1680-1840”, *Itinerario: European Journal of Overseas History*, Vol. 31.
- 大内 力 (1965) 「段階説と類型論に関する覚書——ロストウとガーシェンクロン」『社会科学研究』16-6.
同 (1967) 『「経済学」批判』日本評論社, に再録.
- 小野 進 (1987a) 「経済発展論 (上) —— A・ガーシェンクロンと A・マーシャルそして日本の経済発展への適用とその限界」『立命館経済学』35-5.
- 小野 進 (1987b) 「経済発展論 (下) —— A・ガーシェンクロンと A・マーシャルそして日本の経済発展への適用とその限界」『立命館経済学』35-6.
- 金 泳鎬 (1987) 「アジア経済論の再構築——第四世代工業化論」『経済評論』1987年10月号.
- 篠塚信義・石坂昭雄・高橋秀行編著 (2003) 『地域工業化の比較史的研究』北海道大学図書刊行会.
- 杉山和男 (1965) 「ガーシェンクロン・モデルと日本鉱業か過程の特質——H・ロゾフスキー教授の所論に即して」『金融経済』94.

- 竹内幹敏 (1964) 「アレクザンダー・ゲルシェンクロンのヨーロッパ論」『経済研究』15.
- 玉木俊明・藪下信幸・角井正幸・塩谷昌史・佐藤隆広・福留和彦編評 (2006) 『工業化理論のパイオニアワーク』(仮題) 晃洋書房.
- 角山 栄 (1981) 『経済史学』改訂版, 東洋経済新報社.
- 中川敬一郎 (1962) 「後進国の工業化過程における企業者活動——ガーシェンクロン・モデルを中心にして」『経済学論集』28-2. 同 (1981) 『比較経営史序説』に再録.
- 服部春彦 (1992) 『近代フランス貿易の生成と展開』ミネルヴァ書房.
- 森田 憲, ローズフィールド, スティーブン (1994) 「ポスト共産主義ロシアの経済発展——ガーシェンクロン仮説の再検討」『広島大学経済論叢』18-3.
- 渡辺 尚 (1987) 『ラインの産業革命——原経済圏——』東洋経済新報社.
- オブライエン, パトリック, カール著, 秋田茂・玉木俊明訳 (2000) 『帝国主義と工業化』
- ガーシェンクロン・アレクサンダー著, 絵所秀紀・雨宮明彦・峯 陽一・鈴木義一訳 (2005) 『後発工業国の経済史——キャッチアップ型工業化論——』ミネルヴァ書房.
- ケイン, P・J, ホブキンズ A・G 著, 竹内幸雄・秋田 茂・木畑洋一・且 祐介訳 (1997) 『ジェントルマン資本主義の帝国』I・II, 名古屋大学出版会.
- シュンペーター, J・A 著, 清成忠男訳 (1998) 「経済史における創造的応答」清成忠男編訳『企業家とは何か』所収, 東洋経済新報社.
- ヒルファディング, ルドルフ著, 岡崎次郎訳 (1982) 『金融資本論』上下, 岩波文庫.

The Significance of Gerschenkron's "Economic Backwardness in Historical Perspective" in Modern World

Toshiaki TAMAKI

ABSTRACT

Since the publication of Gerschenkron's "Economic Backwardness in Historical Perspective", many monographs have been appeared on industrialization of backward countries. However, only one aspect of his arguments has been emphasized, namely "the backward countries' economic growth tends to be faster than that of developed ones. In this article, I examine his article in detail and argue the merits and defects of his arguments as a whole.